

二〇二四年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(二回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は **一** から **三**、2 ページから 19 ページまであります。
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一 次の文章を読んで、後の一から十までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

映像を自分の思い通りの状態で「楽」に観るための改変行為、すなわち倍速視聴や10秒飛ばしという現代人の習慣は、文明進化の必然である。……といった言い切りには、まだまだ抵抗感をおぼえる人もいるだろう。作品は作者が発表した通りの形、「オリジナルの状態」で鑑賞すべきであると。

しかし、そもそも我々は多くの場合において、作品を厳密な意味での「オリジナルの状態」では鑑賞していない。

たとえば、映画館のスクリーンで観ることを前提に作られた映画をTくモニターで視聴する時点で、画面サイズは小さく、音響は貧弱になる。場合によっては画角(画面の縦横比)すら「改変」され、スクリーンでは画面端に見えていたものが見えなくなったりする。家庭用ビデオデッキの登場によって映画が映画館以外でも手軽に観られるようになったとき、「あんな小さな画面で映画を味わったとは言えない」と声高に叫んだ映画好きや映画人は相当数に上った。

映画文化に「他の見知らぬ観客と肩を並べ、暗闇で2時間の非日常を過ごす」という体験価値を見出す者にとっても、ビデオデッキによる映画鑑賞は到底認められるものではなかった。Tくが置いてあるのは日常そのものである自宅の居間。トイレのたびに一時停止できる「ビデオ鑑賞」の体験は、真の映画体験とは似ても似つかない。

もっと言えば、自分が理解できない言語で作られた作品を、母国語など理解できる言語の字幕や吹き替えで観る場合、果たして「オリジナルを鑑賞している」と言い切れるだろうか? ある言語のある表現を寸分たがわぬニュアンスで他言語に置き換えることが原理的にできない以上、①字幕や吹き替えは「思い通りの状態で観るための改変行為」ではないのか。

こういう話はレコードが登場して間もない頃にもあった。日本における音楽評論の②草分け的存在である大田黒元雄は、大正期に日本でレコードの需要が急拡大した際、蓄音機で聴くレコード音楽は所詮「缶詰の音楽」だと斬り捨てた。真の音楽鑑賞とは生

演奏を聴くことを指すのであって、録音された音源を機械を通して聴くことを音楽鑑賞とは呼ばない。皿に載ったまともな料理には程遠い、だから「缶詰」なのだ。

ただ、このような「オリジナルからの改変行為」は、むしろ作品の供給側（映画製作会社など）が率先して行ってきたことを忘れてはならない。そのほうがビジネスチャンスは広がり、監督や俳優やスタッフらを含む制作陣がその経済的メリットを享受できるからだ。映画館で上映するだけでなく、ビデオグラム化（VHS、DVDなど）権、テレビ放映権、配信権などを販売したほうが、端的に言ってより大きく儲けられる。

配信メディア会社というだけでなく映画やドラマの製作会社でもあるNetflixやAmazonが、あるいは放送メディア会社というだけでなく番組製作会社でもあるTV局各社が、倍速視聴や10秒飛ばし機能を自社の配信サービス上に実装しているのもまた、「オリジナルではない形での鑑賞」の積極的な提案だ。なぜそんなことをするのか？ 相応の数の顧客がそれを求めているからだ。その求めに応じたほうが、③ビジネスチャンスが広がるからだ。

本書冒頭で筆者は、「テキスト論」すなわち「文章を作者の意図に支配されたものと見るのではなく、あくまでも文章それ自体として読むべきだとする思想」を倍速視聴に当てはめること（製作者が意図しない速度で観る行為）に、抵抗を示した。彼らの動機の大半が「時短」「効率化」「便利の追求」という、きわめて実利的な理由だったからだ。これは作品を（あるいはコンテンツを）鑑賞する（あるいは消費する）態度のいちバリエーションとは、到底言えないのではないかと。

しかし、レコードやKHSやDVDは、「聴く／観るためにわざわざ家から出なくていい」「好きなタイミングで何度でも視聴できる」という、極めて④実利的な特性によってその存在意義が支えられてきた。レコード会社や映画会社やDVDメーカーも、ビジネスチャンスの拡大というこれ以上なく実利的な動機をもって、これを推進してきた。

すなわちレコードやVHSやDVDでの視聴も「実利的な目的のために、オリジナルの状態で鑑賞しないことを許容する」という意味において、倍速視聴や10秒飛ばしと⑤「同罪」である。あるいは、もしそれらを罪とは考えず「作品鑑賞のいちバリエー

シオン」と認めるならば、今度は倍速視聴しちようや10秒飛ばしのほうも「作品鑑賞かんしょうのいちバリエーション」と認めなければならぬのではないか。

我々の社会では、新しいメディアやデバイス*8が登場するたび、あるいはそれらの新しい使い方が見いだされるたび、大田黒のよ
うな⑥ “良識的な旧来派” が不快感を示すという歴史が繰り返されてきた。

後に「芸術」の属性を勝ち取った映画ですら、登場時は「芸術にはなりえない見世物」という扱あつかいだっし、ラジオ放送が始まって数年は、それを聞かないことが教養ある人々の態度とされた。日本初のT<放送開始から4年後の1957年、昭和日本を代表するジャーナリストにして社会評論家の大宅壮一は、⑦書物と違って受け身で眺めるT<は人の想像力や思考力を低下させる、要は「バカになる」という意味合いを込めて、「一億総白痴化」という流行語を生み出している。

PCやインターネットの登場時にも、この種の抵抗感・嫌悪感けんおかんが「良識的な旧来派」からこぞって表明された。2000年代初頭には、「WEB*9はまとまった長さの文章をAセイドクするのに向いていない」と言って記事を全部プリントアウトして読む年配層がオフィスに一定数いたし、2010年頃ですら「PCの小さな画面で観る映画など、観たうちに入らない」と不快感を示す映画好きがそこかしこにいた（さしずめ「缶詰の映画」とでも言おうか）。

また、本を読む方法としての「デジタルデバイスで閲覧する『電子書籍』」「朗読音声で聴く『オーディオブック』」が、これほどまでに出版社にとって無視できない売上になることを、電子書籍とオーディオブックそれぞれの登場時に予測できた者が一体どれほどいたか。むしろ「本を読む体験としては、本来の方法にBイチシルク劣る」と、いずれに対してもケチをつけた「良識的な旧来派」たる本好きは多かつたはずだ。

新しい方法というやつはいつだって、出現からしばらくは「⑧」当たりが強い。

C目下のところ、倍速視聴や10秒飛ばしという新しい方法を手放して許容する作り手は多数派ではない。『良識的な旧来派』からは非難轟々である。

しかし、自宅でレコードを聴いたり映画をビデオソフトで観たりといった「オリジナルではない形での鑑賞」を、ビジネスチャンスの拡大という大義に後押しされて多くのアーティストや監督が許容したのと同様に、倍速視聴や10秒飛ばしという視聴習慣も、いずれ多くの作り手に許容される日が来るのかもしれない。

我々は、「昔は、レコードなんて本物の音楽を聴いたうちに入らないって」⑨「くじらを立てる人がいたんだって」と笑う。しかしそう遠くない未来、我々は笑われる側に回るのかもしれない。

「昔は、倍速視聴にいちいち」⑨「くじらを立てる人がいたんだって」

(『映画を早送りで観る人たち』 稲田 豊史)

(注)

- *1 ビデオデッキ——画像の記録・再生をする装置。
- *2 レコード——演奏などを録音し、レコードプレイヤーによって再現する円盤。
- *3 蓄音機——円盤レコードの溝に針を接触させ録音した音を再生する装置。
- *4 メリット——利点。
- *5 ビデオグラム化(VHS、DVDなど)権——国内において映像ソフトとして複製、発売及び広くいき渡らせる権利。
- *6 コンテンツ——情報の中身。
- *7 バリエーション——変種・変化。
- *8 デバイス——機器・装置・道具。

*9 WEB——インターネット上の様々な情報を見られるシステム。

問一 空らん「㉠」と「㉡」の中に入る言葉をそれぞれ漢字一字で答えなさい。

問二 ー線①「字幕や吹き替えはくではないのか」とありますが、これはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 字幕や吹き替えは、鑑賞者が自分の思い通りに解釈できるものなので、改変行為であるということ。

イ 字幕や吹き替えは、翻訳者の手が入ることによって原典との違いが生じるので、改変行為であるということ。

ウ 字幕や吹き替えは、鑑賞者の想いを汲み取って翻訳者が考えたものなので、改変行為であるということ。

エ 字幕や吹き替えは、鑑賞者が画面に表示された多様な言語の中から選べるので、改変行為であるということ。

オ 字幕や吹き替えは、翻訳者の母国の文化や思想が入り込む可能性が高いので、改変行為であるということ。

問三 ー線②「草分け的存在」とありますが、その意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 多面的存在
イ 後継者的存在
ウ 世界的存在

エ 先がけ的存在
オ リーダー的存在

問四 ー線③「ビジネスチャンスが広がるからだ」とありますが、本文中において「ビジネスチャンスが広がる」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世間の人々は、経済的に不況である時期も余暇を楽しむサービスを求めてくるので、会社の収益には好都合だということ。

イ 世間の人々が自身の求めるサービスを提示してくれることで、会社は自ら考える手間を省き楽に仕事できるということ。

ウ 世間の人々が余暇を楽しめるようにするために、会社は次々とサービスを考えていかなければならないということ。

エ 世間の人々に対して多分野におけるサービスを提供すれば、多様な社員の活躍が期待できるようになるということ。

オ 世間の人々の要求にあったサービスを提供すれば、おのずと収入が増え、会社にとって利益につながるということ。

問五 —線④「実利的な特性」とありますが、これはどのような特性ですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他人と空間を共にせず、自分一人の世界に入れるという特性。

イ 時間と空間を問わず、言語能力を高められるという特性。

ウ 場所と時間における制約がなく、効率的であるという特性。

エ 本来支払うべき代金を払わずに無料で見られるという特性。

オ 安価でありながら真の芸術を知ることができるという特性。

問六 —線⑤「同罪」とありますが、この表現はどのような考えに基づいているといえますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア オリジナル性を失ったものを見ることは真の鑑賞とは言えないという考え。

イ オリジナルを離れた状態で鑑賞することを許容するべきであるという考え。

ウ オリジナルでも手を加えたものでも、鑑賞の仕方は自由であるという考え。

エ オリジナルを改変したとしても視聴者からの評価に差異はないという考え。

オ そもそも原作を映画化する時点でオリジナル性は消滅しているという考え。

問七 —線⑥「良識的な旧来派」が不快感を示す」とありますが、これらの人たちが不快感を示す具体的な事例として当てはまらないものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア テレビの生放送

イ 録画で観るドラマ

ウ コンクール会場で聴く合唱

エ ラジオで聴く野球の実況中継

オ 劇場で観る演劇

問八 ―線⑦「書物」とありますが、大宅壮一は「書物」をどのようなものとらえていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Tくのように笑いを取るただの娯楽とは異なり、問題解決を求められるもの。

イ 文字から場面や状況^{じょうきょう}を思い描^{えが}いたり考えたりするのを読者に委^{ゆた}ねているもの。

ウ 提供する側がよく吟味^{ぎんみ}して、受け手の気持ちをよく汲^くみ取^とって表現したもの。

エ 一般大衆を対象にしているのではなく、作品の真の理解者を求めているもの。

オ 文字が持つ多様な意味を理解できる読者だけが楽しめる世界となっているもの。

問九 筆者は「倍速視聴^{しちよう}や10秒とばし」という視聴^{しちよう}方法^{めいほう}について、今後どのようなようになっていくと考えていますか。現状を踏^ふまえ、六十字以内で答えなさい。

問十 ―線A「セイドク」・B「イチジルシク」・C「目下」について、以下のそれぞれの問いに答えなさい。

(1) ―線A「セイドク」の「セイ」に相当する漢字をふくむものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日常セイカツを見直す。

イ 机の周りをセイリする。

ウ セイリュウにいる魚。

エ セイシンをきたえる。

オ クイズにセイカイする。

(2) ―線B「イチジルシク」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいいにはつきりと書くこと。送り仮名^{がな}が必要な場合、それも解答らん^{らん}に書きなさい。)

(3) ―線C「目下」の正しい読みがなをひらがなで書きなさい。

三 次の文章を読んで、後の一から十までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

始業式の日、律は上の学年の子に引率されて登校し、午前中で帰ってきて、自宅で理佐が朝作った十枚切りのパン二枚にハムを一枚はさんだだけのハムサンドを食べ、春休み中の午後と同じように水車小屋に出かけた。それまでと違っていたのは、松ぼっくりを三つほど、①ネネへのお土産にできたことだった。

「ガムテープの芯はなかなか手に入らないだろうし、ダンボールもそのへんにあるの持ってっちゃったらどうだろうかなと思うんだけど、松ぼっくりならなんとかできると思ってる」

しかし、その時律が持ってきたものは、新しく拾ったものではないようだった。ネネが遊んでいる松ぼっくりについて、外で拾ったのをあげていいかと律が杉子さんにたずねると、松ぼっくりを拾ったらまず浪子さんの旦那さんの守さんに渡して茹でてもらって、とのことだったという。それで拾ったものを渡しに行くと、守さんは代わりに同じ数の松ぼっくりを律に渡してくれたそうだ。少し耳が悪い守さんに、どうして松ぼっくりをゆでるんですか!? と律が大声でたずねると、虫がいるからね! と守さんは同じぐらいの大きな声で答えてくれたと律は話していた。

新しい松ぼっくりをもらうと、ネネは鳥らしい歓声をあげてすぐにかじり始め、三十分ほどで食べればのぼろぼろにしてしまった。

守さんと松ぼっくりを交換した件について聞いたあと、寄り道したの? と理佐がたずねると、律は首を振って、そのへんに落ちてると言った。確かに、理佐の休みの日に二人で歩いてみた小学校までの道には、上の方に松林がある急斜面に面した道があった。都会育ちの理佐には想像もつかなかったような通学路で、何か律が危険な目に遭ったらと思うと気が気ではなかったのだが、このあたりの小学生はみんなそういう所を通って学校に行くのだ、それに事件があったという話を聞いたことはない、と浪子さん

に言われてようやく納得した。

律によると、登校は集団登校だが、下校は土曜日のみ集団下校であるとのことだった。平日の下校は、できるだけ子供たち同士で帰るように、クラスの先生がそれとなく帰宅方向が同じ子同士でグループを組めるように、あの子と帰ったら？ あの子と帰る方向が一緒だよ、などと教室を出る時にいちいち提案してくれるらしい。律は、駅の近くの小さな分譲地に住む、片方が同じクラス②双子の女の子たちと帰ってきたという。どんな子たち？ とたずねると、え、双子だから似てる、と律は、愚問を、という様子で訝しげに答えた。

みんなと仲良くできそう？ と律にたずねながら、いや、なんか小学三年がされたくないぐいの子供扱いをしているかもな、と理佐は言い方を間違えたように感じた。律は案の定、少しむっとした顔をして、みんなと違っていうのはないんじゃないの？ ちよつとはん囲が広すぎるよ、と反論した。

「気が合う合わないはあるものね」

「そうだよ」

前の小学校で律がどういう子供だったのか、理佐はほとんど知らなかった。いじめられているという話は聞かなかつたけれども、人気のある子供というわけでもなさそうで、おたんじょう会はやらなくていい、と母親に言っているところを去年見たことがある。理佐は小学四年までは誕生日会に行ったり、自分もやってみたりしていたので、なんだか冷めたところのある子だなど思っていた。友達は、親しい子が数人だけはいたようで、理佐との引越しが決まった時はその子たちに手紙を書いていた。

「まあ、早く友達を作らないと」

「お姉ちゃんなのに、お母さんとか先生みたいなこと言わないでくれる？」

「それはそうか」

自分自身の小学校と中学校と高校の生活のことを考えると、友達に恵まれた学年もあればそうでない学年もあるので、あまりに

『年かさの人間が小学生に言いそうなこと』ばかりをなぞっていると律に③変な圧力をかけるかもな、と理佐は思い直した。そうはいっても、子供は子供同士というだけで友達になれたりもするもので、慎重に期待しないように心がけていた様子の律にも、それらしき付き合いの相手はできた。それが、店にそばを食べにやってくる、榊原さんの娘さんだった。

ある日、短縮授業を終えて通常の時間割をこなすようになった律が、同年代の女の子を水車小屋につれてきた。その日は五時間目まで学校の授業がある日で、理佐の方が早く水車小屋に行っていた。女の子は、理佐に、こんにちは、と硬い声で挨拶したかと思うと、すぐにラジオから流れるヘンデルのピアノ曲に聴き入っているネネに心を奪われた様子で見入っていた。律は、音楽を聴いているネネを尊重しているのか、何か話しかけようと身構えている様子の女の子に向かって口元に人差し指を当てていた。

「曲が終わったらあいさつしよう」

「うん」

女の子は、ヘルメットのように切った短い髪に、緑一色のシャツを着て、くすんだ青色だがデニムというわけではないズボンを穿いていた。律が連れてきた友達らしき女の子、というだけで、理佐にはとてもかわいい子なのだが、それはおいておいて、なんだかおじさんが適当に合わせたような服装だな、と思った。自分自身も洗濯ができた頃から服を着ていて、べつにおしゃれなほうでもないのは棚に上げるとしても。

彼女は、律に向かって、この鳥、ものまねするんだよね？ と④ひそひそ話しかけていた。律が、そう、うまいよ、と少しはばるるように言うと、でもピアノのまねはしないんだね、と返して、またネネに見入っていた。頭のいい子だな、と理佐は思った。

⑤そうじゃないと律の相手はつとまらないのかもしれないけれども。

ちなみに律は、最初の日に一緒に下校した双子とは、「話が合わない」という。双子は双子の間の話しかしないし、他人にまったく興味がなくて困る、と律は大人が苦言を呈するように言っていた。

曲が終わると、やっと律は彼女をネネの目の前に押し出して、ひろみちゃんだよ、と言った。

「ひ、ろ、む、む、むい……ちゃん！」

どもりながら口の中で音声を転がしているにもかかわらず、ネネはまるで、天国の奥で座って待ち受けている神様か何かのような威厳を漂わせて、止まり木から軽く身を乗り出しながら「ひろみちゃん」を覗き込んだ。言いにくればひーちゃんです、と律に「ひろみちゃん」と紹介された彼女は丁寧に言い直して、律は、ネネ、ひーちゃん！ とさらに簡単に訂正した。

「ひーちゃんだって！」

「ひーちゃん！」

「ひーちゃん！」

そちらのほうは言いやすかったのか、ネネはすぐに、ひーちゃん、ひーちゃん、と連呼し始めた。得意な発音を何度も言って羽をばたつかせたり体を左右に動かしたりするネネよりも、苦手な言葉を克服しようとおずおずと真剣に繰り返すネネのほうが偉いように見えたことが、理佐には興味深かった。

ひろみちゃん、手出して、これネネにあげて、と律はキュロットのポケットからどんどん松ぼっくりを出して彼女の手に置いていった。ネネは、おー、おー、おー、おー、と低く鳴きながら、貢ぎ物を検分するように「ひろみちゃん」の両手の中の松ぼっくりを覗き込んだ。そして、一つ摘んで口にくわえたかと思うと、上を向いてくちばしの前後に移動させながら、満足げにかじり、今度は台の上に飛び移って吐き出し、熱心につつき始めた。

理佐は、そういえば、と気になって、引き戸の窓の向こうの石臼とその上のじょうごを覗き込んだのだが、まだそばの実半分ほど残っていた。ネネが松ぼっくりや新しい人に自分を見せることに夢中になって、「空っぽ！」を忘れたりしているのではないかと危惧したのだが、その後、松ぼっくりで遊んでも石臼を確認する頃合いはちゃんと思いついたようで、「空っぽ！」と叫んでいた。ネネの中には何か、正確に時間を測る装置のようなものが隠れていると理佐は思った。なのに、ケージに入れて布をかぶせたら昼間でも夜と勘違いして寝てしまうのよ、と杉子さんが言っていたのが不思議だった。

ネネは、「ひろみちゃん」の肩に止まって、服でくちばしを拭くところまで慣れたようだった。理佐は、ごめんなさいとあやまりながら、ネネの今日の食事がひまわりの種だけで良かったと心から思った。「ひろみちゃん」は、平気です、と答えて、これもそうだけど、次からは汚れていい服で来ますね、と付け加えた。

「ひろみちゃん」は、ネネの「空っぽ！」を三回聞いた後、習い事の練習があるから、と言って帰って行った。律は、ピアノだつて、かっこいいね、と理佐に向かって両手を広げて見せた。

「私もへねこふんじやった」なら弾ける」

「私も弾ける」

「私はものすごく速く弾ける」

そうやって姉妹でくだらないことで張り合った後、あの子は同じクラスなの？ と理佐が訊くと、ううん、と律は首を横に振った。実は集団登校で同じグループなのだが、彼女は其中ですすでにできあがっている三年生の小グループにいて話しかけにくかった、と律は説明を始めた。

律が小学校からの帰り道で双子と別れた後、少し戻って松ぼっくりを拾っていると、彼女が通りかかったらしい。「ひろみちゃん」は「ひろみちゃん」でいつも一緒に帰っている子がいるのだが、その子はその日は風邪で休みだったので一人で下校していた。松ぼっくりを拾い上げて熱心に検分している律に、「ひろみちゃん」は、転校生の子だよ、集団登校にいる、と話しかけた。律は、そう、とうなずいて続けた。転入生っていうんだっていせいでくる人もいるけど、⑥転校生の方が通りがいいよね。

「ひろみちゃん」は、変な子だと思っただろう、と理佐は考えた。けれども呆れて通り過ぎるということはせず、律の松ぼっくり拾いに興味を示して手伝ってくれたそうだ。

山下さんちさ、しゃべる鳥いるんでしょ、と彼女が言うと、わたしの鳥じゃないけどね、と律は答えた。お姉ちゃんがはたらいてるそば屋さんの、亡くなったおじいさんの鳥。彼女は、でも会えるんでしょ、いいなあ、と心の底からという様子でうらやまし

げに言ったので、律はとても誇らしく思ったのだという。

「この松ぼっくりも、ネネにあげるんだよ、ネネっていうのはそのしゃべる鳥で、種類は『ヨウム』なんだ」

「ネネはどういう松ぼっくりが欲しいの？」

そう訊かれて、律はうつつとまったけれども、知らないけど、きれいなのと、ぼろぼろなのと、いろいろ混ぜて渡すよ、そば屋さんの店主さんにゆでてもらって虫を殺すんだ、とさらに熱心に松ぼっくりを検分し始めた。「ひろみちゃん」はそれを手伝い、その後帰宅してランドセルを置き、すぐに水車小屋にやってきたそうだ。

⑦ネネがご縁になってくれて良かったよね」

「うん。ひろみちゃん、今日知り合ったばかりだけど、いい人だと思う」

小学三年でも、友達が「いい人」か否かが重要なのはそうだよな、と理佐は思う。⑧性格のいい友達を見つけるのは、子供の人間性がまだ剥き出しのまま交ざり合っている小学校ではとても難しい。

「ずっと仲良くできるといいね」

「うん。がんばる」

理佐にとって律は、子供というよりも、自分が世話をしなければいけない背丈が低くてたまに突拍子もないことを知っている変な人、のようなどころがあるのだが、⑨この時ばかりは子供らしいと思った。律が悩むようなことになれば理佐もきつと悩むだろうし、できるだけ応援しなければ、と理佐は決めた。

(『水車小屋のネネ』 津村 記久子)

(注)

*ー じょうご——ここでは、そばの実を入れるためのろうと。

問一 —線①「ネネ」とありますが、その説明として間違っているものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 律が亡くなった祖父から引き継ぎ飼っている。

イ 大好きなエサの松ぼっくりを与えると喜ぶ。

ウ 石臼のそばの実が空になると知らせてくれる。

エ 理佐が働くそば屋の水車小屋で飼われている。

オ 人の言葉をまねするヨウムという種類の鳥。

問二 —線②「双子の女の子たち」とありますが、「双子の女の子たち」に対して律はどのような思いを抱いていますか。本文中から六字で探し、抜き出さない。

問三 —線③「変な圧力」とありますが、ここで言う「圧力」とはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 姉も保護者として学校生活を見守っているという恩の押し付け。

イ 自身がかつて経験してきた学校生活に基づく理想の押し付け。

ウ 学校で多くのことを学んでほしいという過度な期待の押し付け。

エ 自立心が出てきた妹の個性を育むような姉の親切の押し付け。

オ 友達ができないと困るだろうという大人の価値観の押し付け。

問四 —線④「ひそひそ話しかけていた」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ものまねをするのが得意なネネがラジオと一緒に歌っている声をよく聴くことができるように、静かな環境を守りたかったから。

イ ネネがラジオから流れるヘンデルのピアノ曲に熱心に聴き入っているのを見て、何としても音を立てないように気を張っていたから。

ウ 曲が終わるまで静かにしていようといった意味合いのことを律から言われ、その意図を汲み取り、大声で話すことを遠慮したから。

エ ネネは人の声を耳にしたそばからまねし始めてしまうため、下手に刺激を与えて覚えてほしくない言葉を聞かせたくなかったから。

オ 天国の奥で座って待ち受けている神様か何かのような威厳を漂わせているネネを前にして、自然と厳かな気持ちになったから。

問五 —線⑤「そうじゃないと律の相手はつとまらないのかもしれないけれども」とありますが、「理佐」がそのように思うのはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好奇心旺盛で一見突拍子もないことをしたり、独自のルールを持って行動していたりする律には、賢い子でないと張り合いがなく感じられるだろうと思ったから。

イ 同年代の女の子が喜ぶようなことに興味がなく、子供らしさに欠けている律にとっては、同年代の女の子はたいがい子供っぽく感じられるだろうと思ったから。

ウ 人目を気にしないで松ぼっくりを一人で拾っているような律の面白い性格を分かってくれるのは、ある程度頭のいい子でないと難しいだろうと思ったから。

エ こだわりがあり理屈っぽいところのある律にとっては、律の話を理解しつつ、きちんと自分の感じたことも言う子でないと話が続かないだろうと思ったから。

オ 理佐の小学生の頃とは違って何に対しても冷めている律は、大人びた子が相手でないと印象が悪いととらえられ、いじめられてしまうのではないかと思ったから。

問六 —線⑥「転校生の方が通りがいいよね」とありますが、これは誰が誰に同意を求めた言葉ですか。最も適当なものを次のア〜オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 理佐 イ 律 ウ ひろみちゃん エ 先生 オ ネネ

問七 —線⑦「ネネがご縁になってくれて良かったよね」とありますが、これはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ネネの存在をそば屋の常連客である親から聞いたことで、ひろみちゃんが律に対して興味を持ってくれたということ。

イ 律がネネの世話をしていることが会話のきっかけとなり、互いに強く関心を持つようになっていったということ。

ウ ネネの世話をしたり一緒に遊んだりすることで気まづさがやわらぎ、ひろみちゃんと自然と友達になれたということ。

エ ネネのために松ぼっくりを拾っていたことがきっかけでひろみちゃんに声をかけてもらい、仲良くなれたということ。

オ 放課後にネネが好きな松ぼっくりと一緒に探した縁で、ネネと交流していくうちに互いに信頼が深まったということ。

問八 —線⑧「性格のいい友達く小学校ではとても難しい」とありますが、これはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子供は自分の気持ちを優先させがちで、他人に興味を持ってたり合わせたりできる子に出会えるのはまれだということ。

イ まだ自分の欲求のままに行動してしまう子供のうちは、お互い譲らずにぶつかってしまうことがよくあるということ。

ウ いい人に見られたいというような意識がない子供のうちは、場をわきまえない行動を取ることが多いということ。

エ 人付き合いの経験が少ない子供のうちは、適切な距離感をつかめずに友達付き合いに失敗することもあるということ。

オ まだしつけを受けている最中の子供のうちは、社会のマナーや思いやりの身に付き具合に個人差があるということ。

問九 —線⑨「この時ばかりは子供らしい」とありますが、理佐がそのように感じた理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今まで律は理佐に対していつも対等な口をきいていたが、この時は友達ができうれしいという話を子供らしい口調で報告してきたから。

イ 今まで律は自分を心配してくれる理佐に反発する時もあったが、この時は素直に友達と仲良くしたいというような発言をしたから。

ウ 今まで律は理佐に心配されてもそれを跳ね飛ばすふてぶてしい態度だったが、この時は本当に友達ができるかどうか不安な顔をしていたから。

エ 今まで律はマイペースに一人遊びばかりしていて無口だったが、この時は友達と遊んで楽しかったという話を無邪気にしていたから。

オ 今まで律はすぐに理佐に言い返す生意気な態度だったが、この時はひろみちゃんと友達でいられるように頑張るとけなげに返事をしたから。

問十 二重線「なんか小学三年がく間違まちがえたように感じた」とありますが、それはなぜですか。四十五字以内で説明しなさい。

